

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4091300089		
法人名	医療法人社団誠仁会		
事業所名	グループホームめおといわ	(ユニット名	はなみずき1・2)
所在地	福岡市城南区松山2丁目8-3		
自己評価作成日	令和2年11月5日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益社団法人福岡県介護福祉士会		
所在地	福岡市博多区博多駅東1-1-16第2高田ビル2階		
訪問調査日	令和2年12月4日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

現在コロナ禍にて、行いたいことをできていない現状があります。区役所などとの連携は、管理者が認知症サポート養成講座を外部に行いに行き、その際区役所の方と連携をとっています。今後もできる限り、地域に貢献していこうと考えてます。入居者へは、理念に「入居する前の暮らしの継続」を掲げており、極力継続してもらおうスタッフで考えてケアを行っています。日々の空きの時間を埋めるという考えではなく、承認欲求をどのように満たしていただくかを考え、ケアを行っています。もちろん、医療法人ですので、極力医療ニーズが高い方の受け入れもできるよう、診療所と連携をとっております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

介護保険制度スタートと同時に病院併設として1階にデイサービスと小規模多機能施設、2階に当事業所を開設している。敷地内に同法人の診療所・訪問看護・居宅介護支援事業所があり、隣接した大規模な公営団地の住人は高齢化や単身高齢者が多くっており、当事業所を含めて地域の介護資源となっている。当事業所は看取りまで取り組んでおり、利用者や家族は安心している。管理者は、地域密着型としてグループホームのあるべき姿に向けて、熱い思いをもっており、スタッフの考えや意見を大切にして取り組んでいる。また、利用者の思い・意思を尊重し、利用者の行きたい所やしたいことを奪わないという方針で、コロナ禍にあっても感染防止対策はもちろんのこと、対応の方法をスタッフと共に考え実践している。コロナ禍で実施できないことも多いが、収束後の取り組みが楽しみであり、期待できる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念はスタッフみんなで作成し、実践につなげている。地域密着は、コロナ禍のため、行えていない。	管理者をはじめ計画作成担当者がスタッフの意見を聞いて「入居前の暮らしを継続できるようケアを行う」と、今年5月に理念の見直しをしている。職員に浸透しているが、利用者や事業所が地域の一員であることの意識やつながりが乏しい。	グループホームが地域密着型であることの意識をスタッフ全員が持ち、コロナ収束後ケアに反映できるように再度見直しをする機会を持つことを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年の1月は他事業所の餅つきへ参加しましたが、それ以降はコロナ禍の為行えていません。	消極的であった地域とのつきあいを地域密着型事業所として地域の資源を活用し、今から積極的に取り組みをと管理者は考えていたところであった。コロナウイルスが収束すれば、実施する予定である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍の為に行えてませんが、今後認知症カフェをできればと考えてます。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は、コロナ禍の為行えてません。	3月以前は定期的実施していた。コロナ禍の実施については行政から事業所の判断とのことで、病院等を多数開設している法人の判断で実施していない。コロナウイルスが収束すれば、実施する予定である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議を行っていた際は、包括や区役所の方に来てもらい、問題解決に協力してもらっていた。	管理者が区役所の人と別の施設に集まり、困っていること等を話し合い、解決に向けている。研修案内やコロナ対応の仕方、介護保険について等連絡をとっている。また、市町村と連携してキャラバンメイトとして認知症サポーター養成講座の開催活動を行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービスにおける禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	可能な限り身体拘束は行わない方針ですが、やむをえない場合は、ミーティングを行いモニタリングを行い、適正判断した結果家族に説明し同意を得るようにしている。また、拘束後はデータを毎日とり、行動制限廃止委員会を中心に、継続を検討している	行動制限廃止委員会をつくり身体拘束をしないケアに取り組んでいる。常に利用者を見守り、様子を把握するようにしており、機能訓練や外出を好む利用者には散歩等をして閉塞感を感じないように対応している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	職員は研修に参加し、職員全体に周知徹底を行っている。また、虐待が見逃されない環境作りを主任・ケアマネ・管理者で考えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	実際に後見人がついている入居者がおり、制度を学ぶ機会になっている。また、研修にも参加し、勉強をしている。	法人全体で外部講師を招いて権利擁護についての研修に管理者と2～3人のスタッフが参加している。また、毎月の勉強会の中で年に1回は人権・成年後見制度を入れている。成年後見制度について家族から尋ねられた時は、職員は管理者と一緒に聞くようにしている。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は時間をかけ十分に説明を行っている。改定があった場合には、法人より説明文と再契約を行っている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設置している。意見があれば、改善に向けスタッフミーティングを行っている。また、意見は、意見した本人の同意をとり、掲示版に一定期間掲示している	日頃から本人・家族の意見が言いやすい関係づくりに努めている。コロナ禍での面会の要望があり、個人の要望は全体の要望として捉え、時間調整の上、別棟ケアセンターの一室で短時間の面会可能としている。看取りの人には感染対策を十分に行い居室にて、特別に配慮して面会を行っている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に最低でも1度ミーティングを開き、業務改善などスタッフの意見を取り入れる場を作り、意見交換を行っている。	2ユニット合同と各ユニットで会議を各々月1回開催している。お互いに発言しやすい雰囲気があり、記録関係・動線のあり方・道具の購入等々業務改善が行われている。スタッフの意見に添えない時は、前向きに別の方法等一緒に考えるようにしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人員不足という現状が環境作成に響いている所があるが、一人一人の評価は客観的にやっている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮し生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保障されるよう配慮している	極力個性を大切にし、性別・雇用形態・年齢で差別することなく行っている。	採用にあたって性別・年齢に関係なく、「やる気」があれば採用している。現在、20歳代から70歳代の男性女性が勤務している。歌・体操・料理・壁面構成等々それぞれが得意とすることで生き生きと働いている。また、ケアに関しても個人目標について話しており、仕事に対する意欲が伺える。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	月に1回の全事業所の勉強会があり、その際に人権や啓発をテーマにした勉強会を行っている。	法人全体の事業所で人権に関するマニュアルを作成しており、職員採用時の研修で活用し人権教育を行っている。年に1回は事業所の決まりとして人権教育を行い、また、外部研修で受けた内容は後日、他の職員に伝達研修を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍前は、外部の研修への参加を進めたり、外部より講師を招いて勉強会を行ったりしている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍前は近隣の同事業所へ利用者と一緒に訪問したりしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の聞き取りを担当やケアマネが中心に行い、本人の希望が反映されるような対応やケアプランを作成している。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	担当やケアマネを中心に家族と十分な話し合いのもとで家族の要望を最大限に活かせるよう努力している。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族と管理者・ケアマネで話し合いニーズを引き出し、対応している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	対話やコミュニケーションを大切に、思いを共有しながら生活やケアを行っていく。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	サービス担当者会議や電話など本人の状況・変化など伝え、関係づくりを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や知人との面会についてコロナ対策を行った上で、制限時間などがあるものの、可能な限り大事にしている。	基本的に利用者への訪問はいつでも歓迎している。ただ友人の場合、個人情報の関係上家族に訊ねてからとしている。また、コロナ禍ではあるが、本人の行きたい所は奪わないという方針を持っており、利用者は床屋やスーパーに買い物に行っている。出かける前後は感染対策をしっかり行っている。看取りの人が墓参りを希望された時は家族とスタッフ同伴で支援をしている。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性を意識し、「名前はないが顔なじみ」の関係で自然と会話が成り立つよう努めている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	逝去後葬式に参列、退去後郵便物が届いた際など連携を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段のコミュニケーションや定期的な声掛けで本人のニーズを掘り下げたり、時には代弁を行っている。	管理者をはじめとして、スタッフは日常生活の中で言葉や仕草や表情から、時には手話で本人の思いや意向をくみ取る様に努めている。家族から聞くこともある。知り得た思いや意向は皆で共有して、利用者が暮らしやすいような支援へとつなげている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人のICFを収集し、入居前の暮らしの継続に極力努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	24時間シートを作成し、定期的に更新をしている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族等の意見を聞き、ユニット内でのカンファレンス等を通して、現状に即した介護計画が出来ている。	本人、家族の思いや意向を聞きながら、かかりつけ医の意見をふまえて利用者の担当スタッフだけでなくチーム全体で介護計画を作成している。見直し時期の6ヶ月にとらわれずに状況の変化に応じて随時作り直して現状に即したケアができるように努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の申し送りやユニット会議を活用して職員間の情報の共有を実施し介護計画に活かしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	介護計画を基にサービス提供し状況により利用者のニーズが変化した際は、ご本人の状況に合わせ柔軟な対応が出来るよう、スタッフ間で統一している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍のため、難しい状況である。1名のみ地域のスーパーに買い物にスタッフと行っている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人のニーズや訴えを代弁し、訪問診療の際につたえている。また、日ごろの状態も伝え、連携をとっている。	同法人の敷地内診療所から月2回の訪問診療がある。歯科医師による訪問診療も行っており、他の受診についても要望があれば可能である。家族が付き添えない場合はスタッフが付き添い、受診後は家族に結果を報告している。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	本人の様子やバイタル等、異常などあれば適時看護師へ相談している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	コロナ禍のため、なかなか情報共有は難しいが、サマリーを送ったり、できる限り退院前カンファを行ったりしている。不明な点があれば、電話にて対応をしている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	サービス担当者会議の際に、ご家族と一緒にどうすれば本人のQOLとなるかを話し合うと共に、ご家族の気持ちにも寄り添うように、考えを聞いたり、時には提案をしたりしている。	看取りの段階ごとに、その都度意向の確認を取りながら、関係者全体で力を合わせて支援している。コロナ禍であっても感染防止に細心の注意を払いながら本人と家族が残りの時間を幸せに過ごせるように努めている。要望があれば簡易ベッドや食事の提供も行える。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	旧返事や事故発生の際のマニュアルがあり、それに沿って行っている。また、スタッフに周知してもらうようにしている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	月に1度、防災委員会を開き、検討している。また、その議事録を現場に降ろし周知している。	防災委員会を作りマニュアルを作っている。避難訓練は年2回昼夜を想定して行っているが、今年度はコロナ禍で内部での部分訓練となった。収束後には消防署と地域に呼びかけての合同訓練を計画しており、備品も準備している。避難する時は表札を裏返して避難済み確認の手段としている。備蓄品の管理は防災委員会が定期的に行っている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	スタッフ同士で、注意し合う環境を作っている。カンファレンス時にも、毎回議題にあげ、意識の統一・継続を行っている。	利用者への言葉かけや対応が適切であるかをスタッフ全員いつも考えて個々の人格を尊重し敬意を払って接している。トイレ介助や入浴介助の折も安全と尊厳に配慮しつつ介助している。要望に応じてトイレや入浴の同性介助も行っている。記録の記入は周りに配慮して行い、鍵付きの棚に保管してプライバシーの確保に努めている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者に寄り添いながら会話や行動から汲み取りサービスに活かしている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	生活リズムや体調に合わせ、その日の過ごし方を本人を中心に送れるよう支援している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	整容の際、見守りを行い、衣類を一緒に選んだり、髪形も、理美容がある際は、一緒に考えたりしている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	真空パックに出来上がったものを入れて届けてくるので、個別性を踏まえることは難しい。お盆拭きや、下膳を率先して行ってもらっている。	コロナ対策で各テーブルに加湿器を置き、職員と利用者が一緒に食事をしている。ご飯は事業所で炊き、おかずは調理された状態で届いた物を利用者の状況に合わせてソフト食、刻み食、ミキサー食やワンプレートの盛り付け対応をしている。時にはおやつと一緒に作り楽しむこともある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養バランスは、外注なのでカロリー固定で来るので助かっている。定期的に行う採決の結果で、栄養状態を確認している。水分は、毎日測定しており、把握に努めている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食口腔ケアを行っている。今年より、口腔衛生管理加算を取るようになり、歯科と連携を取りながら、口腔内清潔に励んでいる。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	なるべくオムツにせず、トイレ誘導にて排泄を行うようにしている。	入居時はおむつとパッド使用であった方が夜間のみハビリパンツになり、その後日中は布パンツへと自立支援につなげた事例もある。利用者一人ひとりの排泄のリズムを捉え、上手くトイレ誘導することで排泄の自立支援を行っている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	飲水が苦手な人には、好物なものを飲んでもらったり、工夫しながら水分提供に努めている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の日は決めており、好きな時に入るとは難しい。必ず週に2回は入浴してもらうようにし、本人やスタッフの事情にて当日入浴できなくても、別の日に必ず入ってもらうようにしている。	入浴時に湯船につかりながら髭剃りを希望する人に対応するなど気持ちよく入浴してもらえるように支援している。あまり入りたがらない場合は、上手に言葉がけをして無理強いすることのないケアに努めている。浴槽にはいることや、シャワーチェアでの入浴が困難な方にはストレッチャー浴での支援を行っている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中、体を動かしてもらったり、頭を使ってもらったりと、覚醒を促し、昼夜逆転しないよう努めている。希望があれば、日中でも臥床していただくが、極力起きていただくように促している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤管理指導を取っており、薬剤師に行ってもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごすように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々洗濯物干し・たたみなど、残存能力に合わせアクティビティーをしてもらっている。背景因子の家族や本人から聞き出し、活用している。		
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍により、行えていません。1名のみ、週に1度スタッフを買い物に行っている。	現在のところコロナ禍で外出が難しい状況ではあるが、店にコロナ対策の確認をしたうえで理髪店に同行支援を行った。外出が難しい場合でもベランダに出て日光浴をして外の空気に触れることで気分転換につなげるように努めている。コロナ収束後には計画を立てていた外出の再開を考えている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本は金銭は持ち込み不可としているが、たつての希望があれば、ご家族同意のもと持ってもらっている。外出していた時は、ご家族にお金を少しもらい、買い物をしてもらったりしていた。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話を持っている人は、適時電話をしたり、利用者あてにくる手紙には、必ず本人とスタッフが一緒に返信を書き、出している。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室温・湿度を常に把握し、換気も密に行っている。また、季節に合わせて、飾りつけを行い、少しでも季節を味わってもらおうようになっている。	内玄関の横にはクリスマスツリー、それぞれのリビングにはクリスマスの飾りつけがされており季節感がある。テーブルごとの加湿器や空調、照明等も居心地の良いように調整している。車椅子で通りやすいテーブル配置がなされている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	基本、本人が好きなど事で過ごしてもらおうようにしている。快適に過ごせるよう、スタッフも気を使いながら、本人の希望の居場所に移動したりしている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	昔使っていたものなど、持ってこれる範囲で、持ってきてもらい、自室に使用している。	本人が過ごしやすいように居室には好きなものを置いている。整理筆筒、茶筆筒、テーブルや椅子、個々の思い出の品々を持ち込んで。仏壇を置く人もおり各自の個性を生かした居心地の良い部屋づくりを支援している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	本人のADLを見極めて、IADLを考え、積極的に行ってもらおうよう努めている。		